ドイツ大銀行の産業支配

O・ヤイデルス／長坂 聰訳

ヒルファディング『金融資本論』，レーニン『帝国主義論』に大きな影響を与えた古典的名著。金融資本研究に必須の書。

勁草書房

ドイツ大銀行の産業支配

O・ヤイデルス／長坂 聰訳

勁草書房

訳者略歴

1925年生れ。

1950年　東京大学経済学部卒。その後東京教育大学教授を経て，今日に至る。

現　在　大分大学経済学部教授。

著　書　『インフレーション』（労働大学出版部）
『帝国主義論上』（共著）（東大出版会）
『大系国家独占資本主義１』（共著）（河出書房新社）

ドイツ大銀行の産業支配

1984年11月10日　第１版第１刷発行
1985年７月15日　第１版第２刷発行

著　者　O．ヤイデルス
訳　者　長坂（ながさか）　聰（さとし）
発行者　井村寿二

発行所　株式会社　勁草書房（けいそうしょぼう）
〒112　東京都文京区後楽2-23-15
電　話　（編集部）03-815-5277
（営業部）03-814-6861
振　替　東京5-175253

＊落丁本・乱丁本はお取替いたします。　根田印刷／牧製本
＊定価はカバーに表示してあります。

＊無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます。

3033-505803-1863

序

この論文は、ベルリン大学の国家学・統計学研究室で着手され、同大学の文学部（フィロゾーフィッシェ・ファクルテート）に学位論文（ディセルタツィオン）として提出された。ゼリング教授には論文の完成に当たって懇切な御助力を頂いたことにたいして、またシュピートホフ教授にはこのテーマを取りあげるきっかけをつくって頂いたことにたいして、著者は心から感謝しなければならない。

一九〇五年六月

O・ヤイデルス

文　献

この研究対象に参考とされた文献は、次のとおりである。ただし、一般経済学文献やとくにアードルフ・ヴァグナーのようなドイツやイギリスの比較的古い銀行文献、それにザットラーの『証券銀行』(イェナ、一八九〇年) Sattler, Die Effektenbanken (Jena 1890) からアードルフ・ヴェーバーの『預金銀行と投機銀行』(ライプツィヒ、一九〇二年) Adolf Weber, Depositenbanken und Spekulationsbanken (Leipzig 1902) にいたる期間の銀行業にかんする比較的新しい文献——それらについての詳細な文献目録はヴェーバーの書物のなかにおさめられている——のうち、本書の目的には間接的にしか役に立たない部分は、除いてある。

フェリックス・ヘヒト『マンハイムの諸銀行　一八七〇—一九〇〇』(ライプツィヒ、一九〇二年) Felix Hecht, Die Mannheimer Banken 1870—1900 (Leipzig 1902).

カール・フォン・ルム『併合後のエルザス=ロートリンゲンにおける銀行業の発達』(イェナ、一八九一年) Karl von Lumm, Die Entwicklung des Bankwesens in Elsaß-Lothringen seit der Annexion (Jena 1891).

ルドルフ・バンク『経済事情の考察を含むザクセンの銀行史』(ベルリン大学博士論文、一八九六年) Rudolf Banck, Geschichte der sächsischen Banken mit Berücksichtigung der Wirtschaftsverhältnisse (Berliner Dissertation).

クルト・モーリツ=アイヒボルン『アイヒボルン・コンパニーの一七五年の借方・貸方』(ブレスラウ、一九〇三年) Kurt Moriz-Eichborn, Das Soll und Haben von Eichborn & Co. in 175 Jahre (Breslau 1903).

S・ブッフ『ドイツ銀行業における当座勘定業務』(シュトゥットガルト、一九〇四年) S. Buff, Das Kontokorrent-

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

geschäft in deutschen Banken (Stuttgart 1904).

マックス・イェルゲンス『金融トラスト会社』（シュトゥットガルト、一九〇二年）Max Joergens, Finanzielle Trustgesellschaften (Stuttgart 1902).

オットー・リンデンベルク『ある投機銀行の五〇年史』（ベルリン、一九〇三年）Otto Lindenberg, 50 Jahre Geschichte einer Spekulationsbank (Berlin 1903).

シュタウプ『商法典註解』第六、第七版（ベルリン、一九〇〇年）Staub, Kommentar zum Handelsgesetzbuch, 6. u. 7. Auflage (Berlin 1900).

ヴァゴン『ドイツの株式会社の金融的発展』（イェナ、一九〇三年）Wagon, Die finanzielle Entwicklung deutscher Aktiengesellschaften (Jena 1903).

ハーゼ『アー・エー・ゲー（アルゲマイン電気会社）とその経済的意義』（ハイデルベルク、一九〇二年）Haase, Die A. E.-G. und ihre wirtschaftliche Bedeutung (Heidelberg 1902).

エミール・ケラー博士『ドイツ電気工業の発展』（ライプツィヒ、一九〇三年）Dr. Emil Keller, Die Entwicklung der deutschen elektrotechinischen Industrie (Leipzig 1903).

ファゾルト『ドイツ七大電気会社』（ドレースデン、一九〇四年）Fasolt, Die sieben größten deutschen Elektrizitätsgesellschaft (Dresden 1904).

ハンス・G・ハイマン『ドイツ大製鉄業における混合経営』（シュトゥットガルト、一九〇四年）Hans G. Heymann, Die gemischten Betriebe im deutschen Großeisengewerbe (Stuttgart 1904).

O・シュティリヒ『大製鉄企業の分野についての経済学的研究』、『鉄鋼業』第一巻（ベルリン、一九〇四年）O. Stillich, Nationalökonomische Forschung auf dem Gebiet der großeiseninduslriellen Unternehmungen I.

Bd: Eisen-und stahlindustrie (Berlin 1904).

『社会政策学会報』第一一〇巻（ライプツィヒ、一九〇三年）Schriften des Verein für Sozialpolitik, Band 110, (Leipzig 1903) 中の次の諸論文

エルンスト・レープ「一八九五年から一九〇二年までのベルリン大銀行と一九〇〇年、一九〇二年の恐慌」（モーデルーレープの著書『ベルリンス証券銀行』イェナ、一八九六年の続篇）Ernst Loeb, Die Berliner Großbanken in den Jahren 1895 bis 1902 und die Krisis der Jahre 1900 und 1902. (Model-Loeb Die großen Berliner Effektenbanken, Jena 1896, fortsetzend.)

アードルフ・ヴェーバー「ラインーヴェストファーレンの地方銀行と恐慌」Adolf Weber, Die rheinisch-westfälischen Provinzbanken die krisis.

『ドイツ帝国年鑑　一九〇四年』第一、二号 Annalen des Deutschen Reichs 1904, Heft 1 und 2. の中の次の論文

エミール・ヘルツ「プファルツ諸銀行とプファルツ産業にたいするその関係」Emil Herz, Die Banken der Pfalz und ihre Beziehungen zur Pfälzer Industrie.

『経済学・統計学年報』第二集　第二三巻の一　Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik, II. Folge, Bd. 23 I. の中の次の論文

エルンスト・レープ「監査役会」Ernst Loeb, Das Institut des Aufsichtsrats.

『ライヒスバンク　一八七六—一九〇〇年』（ベルリン、一九〇一年）Reichsbank 1876—1900 (Berlin 1901).
『ディスコントー・ゲゼルシャフト　一八五一—一九〇一年、五〇周年記念論集』 Die Diskontogesellschaft 1851—1901. Denkschrift zum 50 jährigen Jubiläum.
ケーニヒ製鉄所（一九〇二年）、ゲルゼンキルヒェン鉱山会社（一八九八年）、ヘルデ連合（一九〇二年）の各記念論集。
『一八九六年六月二二日の取引所法の作用にかんする回顧録』ドイツ銀行連盟本部編（一九〇三年）Denkschrift, betreffend die Wirkung des Börsengesetzes vom 22. Juni 1896 . . . . Herausg. vom Zentralverband des deutschen Bank-und Bankiergewerbes (1903).
『取引所アンケート委員会議事録』Verhandlungen der Börsenenquete-Kommission.
『ドイツ株式会社便覧』Handbuch der deutschen Aktiengesellschaften.
『ザリング取引所新聞』第二、三部 Salings Börsenpapiere, II. und III, Teile.
『ドイツ帝国有限会社便覧』Handbuch der G. m. b. H. im Deutschen Reiche.
『役員・監査役住所録』Adreßbuch der Direktoren und Aufsichtsräte.
『フランクフルト株主』紙、『ベルリン株主』紙 Der Frankfurter und Berliner "Aktionär", 『ドイツチアー・エコノミスト』"Deutsche Ökonomist", 『銀行文庫』"Bankarchiv".
『鉄と鋼』"Stahl und Eisen", 『圧延企業中央新聞』"Zentralblatt der Walzwerke".

『ケルン新聞』Kölnischer Zeitung, 『フランクフルト新聞』Frankfurter Zeitung, 『ベルリン日報』Berliner Tageblatt, 『ベルリン取引所新聞』Berliner Börsencourier, 『ケルン国民新聞』Kölnische Volkszeitung, 『ライン＝ヴェストファーレン新聞』Rheinisch-Westfälische Zeitung. 等

全般的な資料とその利用の仕方については、序論で詳述する。

凡　例

一、本書は Otto Jeidels: Das Verhältnis der deutschen Großbanken zur Industrie mit besonderer Berücksichtigungder Eisenindustrie, Leipzig, Verlag von Duncker & Humblot, 1905. の全訳である。

一、本文中の隔字（分ち書き）の部分は訳文に傍点を付した。

一、書名、雑誌名は、著者による冒頭の文献リストで原名を示し、本文中には初出の場合にのみ原名を付した。

一、訳注は、必要最小限のものに限った。文中＊印を付したものがそれである。(1)、(2)と付されたものは原注である。

一、企業名の原名は、余りにも多数に及ぶため、省いた。

一、文中の改行は、原則として原著に従ったが、原著には往々にして一パラグラフが数ページに及ぶものがあり、こういう場合には適宜改行をほどこした。

目次

凡例
序
文献
序論……一
第一章　産業的銀行業務……一七
第二章　大銀行の発展……七三
第三章　大銀行による対産業関係の形成……二五
第一節　産業にたいする関係の諸形態……二六
一、直接的参与……二八
二、当座勘定業務と銀行信用……一四三
三、発行活動——産業的銀行グループ……一五〇
四、監査役会の機構……一六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二節　産業的勢力圏の具体的構成……一九九
第四章　産業の発展にたいする大銀行の影響……二一〇
外国の産業にたいするドイツ大銀行の関係……二一五
第一節　単独企業のための活動……二二九
第二節　大集合企業と産業グループ組織のための活動……二六五
一、狭軌鉄道業……二六八
二、電気会社……二七七
三、レーヴェ・グループ……二九二
第三節　銀行と全産業の発展……三〇三
一、大銀行とカルテル……三〇四
二、西部ドイツの石炭・製鉄業……三一〇
三、電気コンツェルン……三一九
四、大銀行の工業政策……三二二
訳者あとがき

序論

「全産業の動向は、金融的、あるいは貨幣的観点からも考察しうる」（ホブスン『近代資本主義の発達』七ページ。Hobson "Evolution of modern capitalism", S. 7.）。

近代の産業発展の特徴ともいえる集中への傾向は、どうみても争う余地のない事実であるが、ただこの過程の最終的な帰結と限界については、意見が一致していない。資本主義経済様式をもつすべての国ぐに、とくに十九世紀の三分の二以降のドイツでは、より大きな企業による小企業の駆逐は、商業においても工業においても、あるいは強く、あるいは弱く、時には徐々に、時には急速に、絶え間なく進行している。大経営は改善され、小経営は消滅する。株式会社が個人企業にとってかわる。同じ種類や違った種類の、そして同じ大きさや違った大きさの多数の企業が相互に結合する。製鉄業に混合経営が生まれ、全産業に合同が生じる。

こうした現象は形の上では多様であるが、そこにはひとつの共通点がある。それは、大資本集団の形成がその結果であり前提である、ということである。一方では、産業でより大きな経営形態が形成されるにつれて資本需要が増大し、他方では、みずからも投資と価値増殖を求める大資本が、産業企業の収益をわがものにする。資本的富が増大し、生産形態が高度化するにつれて、財貨生産の姿は徐々に変ってくる。相互に対立しているものはもはや、個人によっ

て管理される単独企業――その完全な独立性は、市場における競争という点だけからいっても、限界にきている――ではなく、産業で活動してはいるが多少とも眼につくほどに資本市場の巨頭たちによって管理されている資本集団である。ホブスンはいう（『近代資本主義の発達』七ページ）。「機械装置のもとで生産方法が変化するにつれて、複雑な貨幣制度が急速に発達し、しかもその貨幣制度が、その国際的、国内的な性格やその精巧な信用機構のなかに、近代的製造業・分配業にみられるような主要な特徴を反映していることに、われわれは気づくはずである」。

産業と商業に投下された資本は、そのひとつひとつをとっても全体としても、ますます大きくなり、その所有者個人からはなれて独自の活動をいとなみはじめるのであるが、そうなるにつれて、資本と信用の媒介機関であることを職能とする純粋な貨幣勢力、すなわち銀行の地位も変化する。銀行は産業にたいしてより緊密な関係を求め、その旧来の関係をある新しい形に変えざるをえなくなるであろうし、産業も、その資本需要の増大のために銀行により強く依存していることをさとって、銀行にその勢力拡張のための好適な地盤を提供する。工業生産の新しい形態の主要な特徴は、まとまった投資のために大資本を集積することであるが、この新しい形態とともに、投資も銀行活動も新しい段階にはいる。

大製鉄業は、その資本需要が大きいために好例とされるのであるが、ドイツについていえば、大製鉄業が十九世紀の四〇年代と五〇年代にどういう発展をとげ、最近の一〇年でどういう発展をとげたかをみるだけでよい。エッセンのクルップ鋳鋼所、ヤコビュ・ハニエル・ウント・ヒュッセン鉄工所――最も完備したドイツ産業企業のひとつであるオーバーハウゼンの現在のグーテホフヌング製鉄所――がいかにのろのろと、手さぐりで生成してきたことか、また、経営の剰余を投資することによって、いかに苦労しながら、一歩一歩大きくなってきたことか。これと、ここ一〇年におけるロートリンゲン＝ルクセンブルクの製鉄業の生成をくらべてみるがよい。八〇年代のはじめには、そこにはまだいうべきほどの製鉄業はなく、一八九〇年にようやく、ロートリンゲンとルクセンブルクで一二〇万トンたらず

（一、一九九、一三七トン）[1] の高炉生産と約二三万トン（二二九、七八五トン）の熔鉄生産が官庁鉱業統計に記録されたにすぎなかったのであるが、それにひきかえ一九〇二年までに、銑鉄生産はロートリンゲンでは六四〇、二二四トンから一、六三〇、二二〇トンに、ルクセンブルクでは五五八、九一三トンから一、〇八〇、三〇六トンへと上昇し、工場拡張の特徴をより強く示している熔鉄生産はロートリンゲンでは一一六、三六七トンから八五六、一九八トンに、ルクセンブルクでは一一三、四一八トンから三一四、九三〇トンへと上昇した。できたばかりの製鋼企業連合においてはロムバハ製鉄所は、重原料（Aグループ。*半製鋼品、梁材、レール）の最大の生産者として、三五〇、七〇〇トンで第一位に位置している。一八八〇年に創立されたこの企業は、一八九〇年までは二六〇万マルクの資本で操業していたが、一九〇二年には約四、〇〇〇万マルクの資本（株式資本、借入金、積立金）をその手におさめ、一九〇一／二年度には鉄鉱石七七二、二二五トン、銑鉄三二六、〇三九トン、鋼製品二九三、六七一トン、圧延製品二五七、三〇四トンを産出した。そのほかにもディッファーディング工場、アウメッツ＝フリーデ等々のように、きわめて資本力のある、技術的にもきわめて完成された企業がある。これらの企業は、年々の経営剰余を新投資にふりむけながら少しずつ拡大したのではなく、他人資本を頻繁に、そして大量に投資することによって飛躍的に拡大したのである。最近の八年間で、この地方の製鉄企業には約一億五、〇〇〇万マルクが投資された。[2] しかしこれらの企業はこのようなことを、大きな資本勢力の援助なしに行ったわけではないし、またできるはずもなかった。銀行の影響がこの地方ほどはっきりと認められるところは、ほとんどどこにもなかった。

(1) 鉱業統計では生産地域の分類が不十分であるため、これでも幾分大きすぎる。

* 製鋼企業連合は規制品目をAグループとBグループに分け、Aグループ（鋼塊、梁材、レール）については生産数量、価格、輸出量を規定し、Bグループ（棒鋼、線材、薄板、鋼管等）については生産数量のみを規制した。

(2) 『フランクフルト株主』紙、一九〇三年一一月二二日。

この点には、再度、もっとくわしくふれることになろう。先の例で示そうとしたことは、投資や、したがってまた投資の機関であり仲介者である銀行が、今日では以前と違った役割を演じているということである。近代的工業生産体制の初期における資本形成にくらべて、投資という要因がますます重要性をおびてくるのであるが、こうした方向でのひとつの変化が認められるとすれば、工業生産の管理が変ってくる可能性も、与えられるわけである。すなわち、産業家の独立性は、投資を求める貨幣資本の代理者であり管理者である銀行によって、制限されるようになる。

これ以後の論述がこうした状況の変化を解明するのに役立つとすれば、それは、これ以後の論述が、ドイツの大銀行の産業にたいする関係を、その最新の状態（およそ一八九五年以降）で詳細に解明しようとしているからである。この種のこころみは、テーマに二重の制限を余儀なくさせる二つの困難を克服しなければならない。ひとつの困難は題材にあり、他の困難は資料にある。題材に困難があるというのは、銀行界の産業にたいする関係が、一方における多数の銀行と、他方における多数のさまざまな産業部門の間で進行しているからである。発券銀行と信用銀行、ベルリン大銀行と地方銀行、発行銀行と純粋な信用機関というようなそれぞれの種類の銀行機関の存立条件と活動がいちじるしく異なっているように、それぞれの産業の技術的、経済的活動条件もそれ以上に異なっているからである。銀行の産業にたいする関係における両方の側の異質性は、おそらくは程度の差から生じるものであって、原則的なものではないかもしれないが、すべての銀行種類とすべての産業部門を考察するには、どうしても予備研究を必要とする。しかしこの予備研究はまだないのである。だから本書では二重の限定がなされている。それは、考察の範囲を、銀行の側では、脇道にそれたわずかの部分を除けば大銀行だけに、産業の側では主として鉱業と製鉄業だけに限るということである。大銀行——ディスコントー・ゲゼルシャフト、ドイッチェ・バンク、ドレースデン銀行、それにダルムシュタット銀行[1]、シャーフハウゼン銀行連合、ベルリナー・ハンデルスゲゼルシャフトをいう——を取りだすことが正当であるのは、大銀行がドイツの最大の銀行機関であって、それゆえに近代のドイツ銀行業の典型とみなされうる

からである。さらに、大銀行が産業にたいする関係を公然と旗じるしに掲げ、そして事実上も強く産業と結びついていたからである。最後に、大銀行は、同じ領域と同じ業務でたがいに競争することによって、さまざまな組織とさまざまな営業原則を、産業全体にたいしても個別産業にたいしても、こころみる機会をもったし、また、こころみざるをえなかったからである。これらの理由は、次のような事情がかさなるにつれて、ますます重みをましてくる。それは、銀行業における集中、株式銀行による小銀行業者の吸収がより大規模になり、中銀行――そのなかにベルリンのナツィオナルバンクとベルリン銀行、中部ドイツ信用銀行、商業・割引銀行、ブレーメンのドイッチェ・ナツィオナルバンク、マグデブルク個人銀行、マンハイムのライン信用銀行、プファルツ銀行、その他の南部ドイツの諸銀行、等々をあげることができる――が大銀行にたいしてますます意義を失ってゆく、という事情である。第一章はもっぱら、これらの諸銀行を、近代の産業的銀行業務の性格から具体的に考察しようとするものである。

(1) 商工銀行 Bank für Handel und Industrie（ダルムシュタット銀行の正式名称……訳者）を以後つねにこう呼ぶことにする。

産業の側で鉱業と製鉄業をとりだしたことは、かなり恣意的である。本書の問題に豊富な材料を提供するものと思われる産業は、化学工業をはじめとして、セメント工業、醸造業など、疑いもなくほかにもある。しかしながら、各産業ごとに技術的、経済的条件がまちまちであるために、多くの産業の状態を同時に考察することは困難であり、さしあたりとくに適した産業を取りあげることは許されることである。それだからここでは、主として製鉄業の生産工程に属する諸企業の銀行関係を考察するのである。そのなかには次のグループをあげることができる。一、石炭業と採鉱業。二、梁材と建材、レール等のような完製品、および中間製品としての薄板、半製鋼品、線材、鋼片等を生産するいわゆる重製鉄業。これらの購買者であり、一部は供給者でもある次のグループがこれに続く。三、小製鉄業、および鉄道車輛製造を含むその他の金属工業。四、海運、幹線鉄道、狭軌鉄道、市街鉄道の分野における運輸企業。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com